

中国のほんの話(73)

## 草森紳一という人がいた ～ 草森紳一『ナンセンスの練習』～

蔭山達弥

毎年春、秋、大阪四天王寺境内で青空古本市が開催される。私もここ数年毎回訪れている。今年の春はある店の三百円均一の台から、評論家故草森紳一の『ナンセンスの練習』（晶文社1971初版）を見つけた。この均一台は一冊買えば、額面どおり三百円だが、どの店も大抵三冊買えば、五百円になるので、ついつい沢山買ってしまふ、なかなか商売上手な台なのだ。

私は、授業の帰り道は勿論、天気の良い休日には大型書店や古本市、最良の古書店に行くことにしているが、その時の本を選択する基準の一つは私がお気に入りの著者が否かである。今回ご紹介する草森紳一の名を遅まきながら知ったのは、月刊誌『本の雑誌』2015年3月号（特集＝本を処分する100の方法！）で、草森紳一氏のご長男、渡部幻氏が書かれた『草森紳一蔵書整理プロジェクトのこと』を読んだのがきっかけである。

それによると、2008年3月、草森氏は独り暮らしの部屋で息を引き取り、心配した編集者によって発見された。死後最大の問題は蔵書の行方で、部屋は賃貸だから、いつまでもそのままにできないので、幻氏の妹の母である東海晴美さんが先頭に立ち、印刷所の倉庫を借り、ボランティアを募り、友人や知り合い、草森ゆかりの編集者が集まり、約二ヶ月を経て、ジャンル分け作業が終了、冊数は約三万冊になったそうである。晴美さんの尽力により蔵書は2009年11月、草森氏の故郷に送られ、北海道音更の廃校になった東中音更小学校に無事保管され、2010年末には帯広大谷短期大学に「草森紳一記念資料室」がオープンした。詳しいことはホームページ「白玉楼中の人：草森紳一記念館」とブログ「崩れた本の山の中から」、「その先は永代橋 草森紳一をめぐるあれこれ」に書かれている。

草森紳一氏は1938年北海道音更町生まれ、慶應大学文学部中国文学科で奥野信太郎や村松瑛に師事、卒業後は婦人画報社に入社。同社を退社後、慶應大学斯道文庫勤務などを経て、評論家となった。草森氏は七十年の生涯に約五十冊の多岐にわたるジャンルの著書と、膨大な原稿を残したが、『ナンセンスの練習』は初期の文集である。筆者が手に入れたのは五刷、当時はかなり読まれたようである。同書の目次を見ると、1964年から1971年にかけて雑誌などに掲載された18編が収められている。その中に、中国の詩や哲学について書かれた3編、『傷つく所は



夢間と覚ゆ』、『抱朴子と幻化の方術』、『萬象森然たり』がある。

では、「中国の夢の描写について」という副題がついた『傷つく所は夢間と覚ゆ』を読んでみる。著名な詩人、白楽天の弟、白行簡の『三夢記』の梗概、「人の夢には常と異なるものがあるものだ。向こうの夢がでかけてきて、こちらでそっくり現実として出逢うことがあり、こちらでやっていることを、向うで夢にみるということがあり、二つの夢が相通するということもある」から始まる。草森氏は言う。「私は、正夢という言葉は、好きではない。この言葉ばかりは、あまりにも現実と夢を分離し、しかも現実のほうに重みをかけていて、夢をたわごとのようにみなしているという前提が、ありありとみえるからで、夢の内容が、彼等のたよりにしている現実の上に顕在した時のみ、ようやく驚きのツラを露わにして、正夢と承認するのである。」同文は続いて、『列子』、『全唐詩』の元稹と白楽天の部、『春秋左氏伝』など文献を渉猟しながら、議論を展開してゆく。その度に私は「うん、うん」と膝を叩いてうなずいてしまうのだ。私が一番惹かれたのは次の一節、「…人生を夢と断じたのは一見よしとしても、それでは夢は人生の如しかといえ、ちがうのであって、あくまでこのような台詞を呟くものは、現実なる人生を中心に思考しているのであって、その逆に夢は人生の如しだとは、けっして考えていない。」この一文を読んだだけでも、草森氏の博覧強記ぶりは並大抵ではないことが分かる。

ネット上にアップされた『北海道新聞』コラムまで（署名菊池信一郎記者、2016.4.18.付）によると、生前に収入の七割がたは本代に消えたという草森氏は「西洋ハットと白いあごひげ、ピース缶を手にぶらぶら歩く姿は仙人のよう」だったそうだ。

かげやま たつや（非常勤講師・中国文学）